

令和 2 年 6 月 4 日現在

機関番号：12601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K21003

研究課題名（和文）自然資源採取・利用活動のアーカイブ化と地域における活用

研究課題名（英文）Archiving of records on foraging activities and its utilization for rural developing

研究代表者

齋藤 暖生 (Saito, Haruo)

東京大学・大学院農学生命科学研究科（農学部）・講師

研究者番号：10450214

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：山梨県山中湖村、岩手県西和賀町、福井県大野市、宮崎県山間部を調査地として、自然資源の採取および加工について、映像を中心に記録した。新規に取得した記録と既存の文献による記録を比較する中で、記録方法とそのアーカイブ方法の妥当性を検討した。映像記録は、撮影中にインフォーマントへの適切な問いかけを交えることにより、より効果的にインフォーマントの行動規範やノウハウを伝える素材となる。行動規範やノウハウを効果的に示す記録は、持続可能な資源利用に基づく地域発展に寄与する可能性がある。自然体験に乏しい子供を対象にした地域文化の継承にも応用しうるが、その詳細な検討は今後の課題となる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、地域文化・社会に貢献する学術記録のあり方として、既存の文書形式と比較し、映像記録の強みと弱みを明らかにした。また、本研究を遂行する過程で、これまで自然資源採取について民俗記録が乏しかった地域において、貴重な一次記録を得た。

本研究において採録および収集された資料は、地域の住民や行政機関と連携して、活用の実践が試みられており、この実践を通じて、より効果的な採録方法がブラッシュアップされつつある。

研究成果の概要（英文）：Various types of records including video on foraging activities in forest and processing of natural resources were collected in four different regions in Japan. Investigating appropriacy of methods of recoding and archiving, it is found out that video records can be an effective method to tell other norms and knowhows during foraging, especially when recorders give some appropriate question to informants while recording. Such records can contribute to local developing based on sustainable resource use. Also, these can contribute to succeeding local culture to children, who don't have enough experience in nature. However, this issue should be investigating in the future.

研究分野：植物・菌類民俗、森林&#8212;人間関係学

キーワード：採取資源 民俗知 技術 技能 映像 地域おこし 倫理的な消費 規範

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

市場経済を重視することによる経済成長は、一面で地方社会の行き詰まりと画一化をもたらしてきた。こうした傾向に早くから気付き、警鐘を鳴らした先学に「地域主義」を主張した玉野井(1976)や「内発的発展論」の鶴見(鶴見・川田1989)がある。こうした主張に共通するのが、地域が持つ自然・文化(風土)の固有性と地域社会形成におけるその活用である。近年、こうした地域固有性は、生態系サービスを適切に管理する上での知識(TEK: Traditional Ecological KnowledgeあるいはILK: Indigenous and Local Knowledgeなど)として(日本の里山・里海評価2010)あるいは、国が主導する「地方創生」政策の中で、ますます注目されるようになってきている。また、ローカルであること、スローであることを重視して地域住民が主体的にかかわる「フットパス」のようなツーリズム創出の動きが各地で活発に行われるようになった(神谷2014)。

研究代表者はこれまで、高度経済成長や林業の低迷から森林と人間の関係性が希薄化していく中で、緊密な関係性をはぐくむものとして、林野における資源採取(特に山菜・キノコ採り、欧州においてはベリー採取)の研究に携わってきた。地域における自然資源採取活動は、地域固有の自然環境および文化・技能に規定されるという点で、地域の固有性を色濃く示すものとして捉えることができる。また、マイナーサブシステム(松井1998)特有の低投資かつ技術的障壁の低さゆえに容易に従事するという性格から、地域の特色を活かした活動として今後の地域づくりに大いに活用しうるものであると考えられる。ところが、こうした採取対象の林野資源は、山村経済を振興する観点から「特用林産物」として、栽培化による生産振興の努力が続けられた結果、その高い生産技術は、すでに山村地域の強みを活かすものではなくってきている(齋藤2015)。

地域住民主体によるローカルなツーリズムに採取資源を活用するならば、それは単なる商品としてではなく、地域に備わってきた知識・技能・文化をも含めて活用することになり、自然資源の付加価値をより高め、地域の活性化に大きく寄与するだけでなく、積極的な地域資源管理に発展することが期待できる。しかしながら、特に卓越した採取技能およびその採取物の加工技能をもつ者は高齢化し、かつ少数となり、新たに資源を活用する世代への継承が課題として立ちだかっている。

自然と関わる民俗は、主に民俗学や文化人類学において一定の蓄積があるが、調査が行われていない地域あるいは採取活動は極めて多い。また、先学の残した記録の多くは、テキストによるものが中心であり、それを活用したい地域住民が必ずしもアクセスしやすい情報源ではない、在地知識・技能にはテキストでは表現しがたい態様が多々ある、といった難点が指摘できる。すなわち、どのような方法で記録を作成し、それをどのように提供するのか、という課題も同時に解決することが求められている。

2. 研究の目的

本研究は、自然資源利用をめぐる地域固有の知識・技能を、有効に地域の将来世代に継承する方法を、その記録から活用まで総合的に検討することを課題とした。

この研究課題に取り組むために、以下の研究目的を設定した。

自然資源の採取および利用に関わる記録を、音声、映像、地理情報など様々な記録方法(技術)を用いてとる。テキストでは十分に伝わらない知識・技能がどのようなものであり、どのような記録方法において有効に記録されるかを明らかにし、伝達可能なものとなるかを検討する。

地域社会における知識・技能伝承や、産物の販売等を通じた地域振興にとって、有効な活用方法はどのようなものであるか検討する。

さらに、地域住民による活用可能性をより高めるために、およびの方法論を詳細にブラッシュアップする(、)。このことによって、地域住民が活用することを念頭に置いた自然資源採取・利用を記録し、継承する一連の方法論について、実践的な一定の指針を示すことを目指す。

3. 研究の方法

<フィールドの設定>

本研究における事例地は、各作業工程の検討の質を高めるため、複数設定した。特に、研究代表者の勤務地が所在する山梨県山中湖村をコア・フィールドとする。山中湖村では、すでに地域づくりの任意団体でフットパスの整備などに取り組む「山中まちづくり委員会」、「一般社団法人山中湖エコミュージアム推進事業団」、地域の入会地管理団体である「富士吉田市外二ヶ村恩賜県有財産保護組合」等との連携を軸に研究目的の遂行を集中的に行い、ここで得られたノウハウを活用して、他事例での連携先との関係構築および作業工程の遂行を行った。

コア・フィールド以外の事例地は、資源採取の文化地理的パラエティ(齋藤2006)を考慮し、東北地方、北陸地方、南九州地方に設定した。東北地方では、研究代表者が調査地としてきた岩手県西和賀町を事例地とする。北陸地方では、2015年より地域の自然資源活用に焦点を当てて本格的に活動を始めた和泉源流プロジェクトがある福井県大野市を事例地とした。南九州地方は、世界農業遺産に認定され、地域の固有資源の活用の気運の高い宮崎県山間部を設定した。

<地域社会との協力体制>

本研究の作業工程を遂行するにあたって、事例地において実践的な検討をするために地域づく

り団体等との連携・協働を模索し、構築する。研究代表者の勤務地でもあるコア・フィールドでは、すでに諸団体との連携の素地があるが、東北地方、北陸地方、南九州の事例地においては、コア・フィールドでの経験を生かし、連携相手を探索し、関係構築を試みた。連携が可能となった団体と、記録の活用方法について、実践を交えつつ検討した。

4. 研究成果

1) 記録の採録

<各調査地での記録の成果>

コアサイトとする山中湖村において、広大な入会地でのワラビ採取の様子、および地域特有のサンショウをすりつぶす調理法に焦点を当て、映像記録を採録した。また、周辺地域では見られない木の実の利用として、クサボケに着目し、その加工・利用方法について映像として採録した。また、クサボケの利用は一部の中高齢者に利用が限られるようになり、また、採取地も狭まっている事情があることから、「山中まちづくり委員会」と共同してクサボケ増殖のための接ぎ木講習会を企画し、その一連の技法について映像による採録を行なった。コアサイトにおけるこれらの記録は、先行文献(上村 1979、吉田 2004 など)では詳細にされていなかった、採取戦略のあり方や、利用方法の内実について、映像記録とすることによって詳細に残すことができた。

東北地方の調査地である岩手県西和賀町では、長らく付き合いがあり、信頼関係の構築されたインフォーマントの採取行動を長時間にわたってGPSデータおよび映像として記録することができた。特に映像記録は、調査者が記録中に問いかけを発することで、それに応えるインフォーマントの規範意識などを引き出す形での映像記録を得ることができた。

北陸地方の調査地である福井県大野市では、山村の特産物として天然の採取物、またその加工品を売り出したいという現地協力者のニーズが前提にあったことから、当地で利用されていないが利用可能性のある資源について、また、採取にたけている採取者の採取行動を写真および動画にて採録を行なった。また、古老への聞き取り調査を行った。その結果、当該地域の郷土史等で記載されていない資源の存在および利用法について記録でき、また、売り物として山菜・キノコが採取される場合の質を高める採取技法について、映像および、映像中のインタビューによって技能伝承に有益な記録を取ることができた。

南九州の調査地である宮崎県山間部では、野生キノコと山菜やカワノリ採取に関する民俗調査をおこなった。野生キノコに関しては、採りの背景となっていた森林環境が人工林化などの影響により、かつてとは大きく変わってしまっているため、また、地域によってはシイタケ栽培の導入に伴い野生キノコ利用が数十年前にほぼ途絶えてしまっているため、聞き取りによる情報收拾が中心となったものの、これまで空白に近かった照葉樹林帯でのキノコ民俗について、現地での記憶が失われる前に貴重な情報が得られた。山菜やカワノリを現役で頻繁に採取している住民を探し出すことができ、その採取過程を映像記録として採録することができた。特に、焼畑が現存する地域において、焼畑休閑林と山菜採取の関連性があること、またそれに関する民俗知が存在していることを明らかにしたことは、重要な成果である。

<記録方法による伝承可能な要素の検討>

本研究では、映像記録を軸としつつ、採取行動のGPSデータ記録、写真による記録、従来の聞き取り調査によるテキスト記録を実施し、かつ既存の主流な情報媒体である書籍等と比較して記録方法やアーカイブの仕方により、こういった内容が有効に伝えうるかを検討した。その結果、以下のような知見に到達した。

記録形態としての動画：採取行動の一部始終をビデオで記録し、特に、問いかけを発しつつ記録を継続することで、文章化の難しい知識や技能、規範意識・行動様式について直感的に伝えることが容易になることがわかった。特に、信頼関係の堅いインフォーマントに対して行なった岩手県での記録映像では、インフォーマントが持つ知識について、編集過程を通じてより掘り下げて知ることができた。対象資源およびその生育環境に関する「生態知」が地域の自然資源の持続的利用に貢献する可能性が多くの先行研究によって指摘されてきたが、この事例では、競合する他者の行動や、地域社会の中での自身の評判を配慮する「社会知・人文知」と呼べるものが、持続的かつ採取従事者にとって実り多い採取の技法に働いていることが明らかになった。同時に、こうした側面を取り上げた映像記録は、公開することの弊害はなく、むしろ地域資源の活用とその保全のために有益であると考えられた。一方で、植物種などの判別や、オンデマンド(非伝承者が知りたいところだけ取り出そうとすること)での情報提供は不得手である。

文章と画像、位置情報の特性：文章はあらゆる事象を表現しうるが、身体的な感覚に基づく知識や行動を的確に表現することは困難である。写真画像あるいは絵画は植物種などの判別において最も強みを発揮する。しかし、一方で類似種との判別が重要になる場合(一方は有毒という場合など)において、その差異を効果的に記録するには、撮影技術に熟練を要する。特に撮影技術の訓練を受けていない者は、複数の角度から対象物を撮影し、3D画像として合成する手法が有効となる可能性がある。GPSデータによる位置情報の記録は極めて正確で、伝承においても威力を発揮すると考えられるが、非伝承者の装置利用可能性によって、全く無意味な情報となりうる。採取現場において、GPSデータを可視化する手段がないあるいは失われてしまった場合は、むしろ、沢や地点に関する個別名称などが伝承されていることの方が役に立つ。テキストや図面に関しては、冊子や資料として編集されていれば、利用者が必要に応じて一部分の情報を取り出

して活用する（オンデマンド）の利便性に優れる。

アーカイブの方法：インターネット上の記録媒体を用いれば、どの記録形態によるものも誰もが閲覧可能なものとして提供が可能である。特定の地域がわかる形で映像記録やGPSデータが無制限に公開された場合、資源を目当てにした来訪者による乱獲や地域住民の財産への侵害行為も懸念される。映像記録の強みである規範的行動を主題とするものは、オープンな形でのアーカイブも許容されるが、地域や資源の存在が詳細に特定されるものは、地域内の公共施設等でアーカイブされ、限定的に伝承利用に供されるのが望ましい。

2) 地域における活用

<各調査地での連携>

コアサイトとなる山梨県山中湖村では、「山中まちづくり委員会」「一般社団法人山中湖エコミュージアム推進事業団」と連携し、林野資源の採取・加工に関する記録の提供を行い、フットパスイベント等を通じた地域性の演出に情報が活用された。こうした実践課程から、地域おこしの素材として記録を活用する場合、その地域文化の固有性やストーリー性を物語るような記録を取ることに重要性が指摘できる。また、山中湖村を包含する入会地管理団体「富士吉田市外二ヶ村恩賜県有財産保護組合」による森林学習施設での展示内容について、資料提供による協力を行った。期間内に完了することはできなかったが、どのような素材がどのように加工し、展示物として活用するのかについて、引き続き、連携しながら検討する予定である。

福井県大野市では、地域振興を担う現地協力者と、一連の資源採取および利用過程に関する映像記録を共有し、その記録の活用方法を検討した。山林資源の活用を図る立場からは、「コツ」が必要とされる加工過程や、品質を高めるような採取方法を地域住民に周知する媒体として映像記録が有効であることが示唆された。一方で、上述のように、対外的な情報提供は、資源の過剰採取を招く懸念も大きいことが確認された。また、記録された内容を元に、山菜やキノコを商品として持ち込む地元住民に、商材としての質を高めるための基準やコツについて示した資料を作成して配布・活用した。また、期間内に実現には至らなかったが、オンラインストア等において採取行動に関する動画を、倫理的な消費に価値を感じる消費者層に訴求することに応用する手法について現地協力者と検討を行った。

宮崎県山間部では、地域の教育行政担当者と、意見交換する機会を持ち、次世代への教育に山野の資源採取・利用をコンテンツとして盛り込むことの意義と可能性を確認した。期間内には実施することはできなかったが、学校教育における継承について、どのような情報・記録が有用であるのかを、引き続き検討していく予定である。

<活用の観点からの記録方法の再考>

採取行動における映像記録は、採取者の行動規範やノウハウをより伝承しやすい形で記録することができる。こうした知識・技能が記録されることは、地域における持続的な資源利用の継続に貢献しうる。同時に、こうした記録は、採取された産物を流通させる際に倫理的な消費を支持する消費者層に訴求しうる広告素材として活用しうることも見えてきた。本研究期間内では実現できなかったが、この試みが、より高付加価値で採取産物を販売することにつながることで、また持続性を意識した採取行動自体が商品価値として評価されることで、採取量が持続可能な水準内でとどまることに貢献する可能性がある。このように、映像記録を撮る上で、採取者の行動規範を記録にとどめることは非常に重要であるが、そのためには、効果的にそれが理解でき、伝わるような記録方法を工夫する必要がある。本研究では、現地でインタビューを交えながら映像記録を撮るという手法が一定の効果をもたらしたと考えられた。

地域おこしのために、採取される自然資源や加工物を活用する場合、その利用文化の固有性を示す事が求められる場合がある。そうした場合、単に映像記録を撮るだけでは不十分であり、既存の文献記録などを参照することによって、固有性を示す必要がある。

本研究期間では十分に検討できなかったが、公教育等で想定される若年層への知識伝承を目的とした場合、必要とされる要素について明らかにする事が重要となる。それに応じて、適切な記録方法を検討することは今後の課題となる。

【文献】

- 上村正名（1979）『村落生活と習俗・慣習の社会構造』御茶の水書房
- 神谷由紀子（2014）『フットパスによるまちづくり 地域の小径を楽しみながら歩く』水曜社
- 齋藤暖生（2015）『特用林産と森林社会 山菜・きのこの今日』『林業経済』67(12)：2-6
- 玉野井芳郎（1976）『地域分権の思想』東洋経済新報社
- 鶴見和子・川田侃編（1989）『内発的発展論』東京大学出版会
- 日本の里山・里海評価（2010）『里山・里海の生態系と人間の福利：日本の社会生態学的生産ランドスケープ 概要版』国際連合大学
- 松井健（1998）『マイナーサブシステムの世界』篠原徹編『民俗の技術』朝倉書店
- 吉田チエ子（2004）『山中湖周辺の民俗』岩田書院

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 齋藤暖生	4. 巻 31/32
2. 論文標題 富士山北東麓の生態と生業 - 地域環境の限界と可能性 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 静岡県民俗学会誌	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 齋藤暖生	4. 巻 215
2. 論文標題 富士山北面における生業の展開と保護地域制度	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	6. 最初と最後の頁 9-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 齋藤暖生	4. 巻 65(1)
2. 論文標題 食用植物・キノコの採取・利用にみる森林文化 文化的要素の抽出および文化動態の解釈の試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 林業経済研究	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Saito Haruo, Horiuchi Masahiro, Takayama Norimasa, Fujiwara Akio	4. 巻 24
2. 論文標題 Effects of managed forest versus unmanaged forest on physiological restoration from a stress stimulus, and the relationship with individual traits	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Forest Research	6. 最初と最後の頁 77 ~ 85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/13416979.2019.1586300	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤暖生	4. 巻 61
2. 論文標題 山中湖のワカサギと東京帝国大学	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 演習林	6. 最初と最後の頁 35-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 齋藤暖生	4. 巻 80
2. 論文標題 ありふれたごちそう～山菜の魅力	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 森林科学	6. 最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.11519/jjsk.80.0_22	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 齋藤暖生	4. 巻 2017
2. 論文標題 山菜・きのこにみる森林文化	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 森林環境	6. 最初と最後の頁 12-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 齋藤暖生
2. 発表標題 食用植物・キノコの採取・利用にみる森林文化 文化的要素の抽出および文化動態の解釈の試み
3. 学会等名 林業経済学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Haruo Saito
2. 発表標題 Variable status of access rights for non-timber forest products in Japan
3. 学会等名 The 16th Biennial Conference of the International Association for the Study of Commons (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 齋藤暖生
2. 発表標題 林野における資源採取の衰退・消滅と法制度に関する試論
3. 学会等名 第129回日本森林学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 齋藤暖生
2. 発表標題 森林文化の継承のためのアーカイブ作成に向けた課題整理ー山菜・キノコ採取活動を題材とした記録媒体の特性の検討ー
3. 学会等名 林業経済学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Haruo Saito
2. 発表標題 Foraging culture of mushrooms in Japan: background and recent trends
3. 学会等名 The 10th International Workshop on Edible Mycorrhizal Mushrooms (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 蛭原 一平、齋藤 暖生、生方 史数	4. 発行年 2019年
2. 出版社 共立出版	5. 総ページ数 308
3. 書名 森林と文化	

1. 著者名 鈴木 牧、齋藤 暖生、西廣 淳、宮下直	4. 発行年 2019年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 192
3. 書名 人と生態系のダイナミクス 2 森林の歴史と未来	

1. 著者名 大高康正編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 風媒社	5. 総ページ数 191
3. 書名 古地図で楽しむ富士山	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----